

千里山で過ごした戦時中の日々

十八回生 寺澤 美代子

(劉)

終戦から七十年目の節目の年に当たる本年(平成27年)には年初来、戦時中の記録や回顧番組の報道が多かった。これらの報道に接する折には、自分が千里山で過ごした戦時中の日々のごとも自然と思いついて出された。いつの時にも恵まれた平和な地と思える千里山においても、各々の家族には、それぞれが体験した戦時中の日々があったことを、若い世代の方々にも伝えたいと思う。

私共の家族が、家族疎開のかたちで大阪市内から千里山に移ったのは、昭和十九年の春頃だった。昭和十六年の開戦から約二年間程の生活では、さほどの危機感もなく、平穏な日々だったと思うが、十九年になると戦況の激化も伝わり、大阪市内の小学校では、学童を安全な地方に移す学童疎開の実施が決定されるといふ事態を迎えていた。

当時父は、北野病院に勤務する医師だったので、扇町にあった病院への通勤が可能で、市内よりも安全な場所としての千里山への移転を願ひ、先代の末広先

生の紹介を得て、十四回生岡本郁子(旧姓山崎)さんの父上が新築なさったばかりの貸家に入れて頂くことになった。

新しく住み始めた家は、当時の千里山住宅地の外れにあり、郊外学園と呼ばれていた公園の前であった。今では緑地公園駅に通じる道が通り、公園全体が住宅地となっているが、当時は、集英小学校など大阪市内の小学校が所有する郊外学園があり、周囲には桃畑、みかん畑、竹やぶなどがある自然豊かな公園だった。家のすぐ前には砂山があり、市内から移って来た身には、楽しい遊び場で、毎日砂山すべりを楽しんで過ごしていた。

引越す前に住んでいた大阪市の東区では、当時すでに各家の前に防火槽を設置することが求められていた。各町内では、定期的に消火訓練が実施され、各家庭から必ず一名の女性が参加することになっていた。バケツリレーの練習も行われていた。夜になると灯火管制のもと、電灯を覆う黒布やガラス戸を覆う黒幕から、少しでも灯火が漏れていると、夜廻りの警防団の人から注意を受ける日々だった。住み始めた千里山の生活では、灯火が漏れないような注意はしていたものの、厳しい見廻りもなく、防火訓練などを目にするともなかった。全体として、のんびりした印

象を受けていた。

しかしながら、こうした平穏な状況も、十九年の秋頃からは一変し、千里山の生活でも、戦時色が濃くなっていった。空襲に備えて家の白い壁を目立たなくするために黒いすすで汚したり、各家庭毎に防空壕も用意した。我家でも家の前の空地に防空壕を作り、庭にも大きな穴を掘って、いざという時には、家庭の必需品を入れて砂を掛けて埋めることが出来るような準備も行っていった。

登校しても、警戒警報が出ると帰宅となり、警報が解除されると、持ち帰ったお弁当を持って同級だった十八回故宇都宮信子さんと砂山に登り、一緒に昼食を楽しんだことなど、当時の数少ない楽しい思い出の一つとなっている。

しかし、こんな楽しみも僅かな間のこと、その内には、警戒警報発令の頻度が増し、空襲警報も発令されるようになって、勉強どころではない日々を迎える事態となった。警戒警報の発令には慣れてしまっていたが、空襲警報のサイレンは恐ろしく、特に静かな夜中に鳴り響いた空襲警報のサイレンに怯えたことは、今も忘れられない思いがする。

昭和二十年三月十三日の大阪大空襲の日には、大阪方面の夜空が、赤く焼けて見えたことを覚えていいる。男子生徒なら手伝つただろうが、我々五年生の女子生徒では、何の役にも立たず、担任だった明原先生が、汗を流しながら黙々と、重労働の作業を続けておられたのを覚えている。その折の明原先生のお姿を思い出すと、今でも、申し訳なかったと、すまない思いでいいる。

各家庭でも、食糧難に備えて、空地や家の庭は勿論のこと、家の前の道端に至るまで、耕せる土地があれば、全て利用して野菜を育てていた。食糧の配給制度もあって、何種類かの野菜や穀物など、少しずつ各家庭あてに均等に分けられた食物を、隣組の組長さんのお宅まで、取りに伺ったことを覚えていいる。しかし、こうした配給物の量は、ごく少量で、家族の食事の足しにするには程遠く、育ち盛りの家族を支えた母の苦勞は、日々大変であつたらうと思う。

母が、知合いの農家に、農作物を分けて買いに行くのに付いて行くことがあつた。竹やぶの間を抜ける暗い夜道を歩くので、私が怖がっていると、「軍歌でも歌って歩けば怖くないよ。」と話し、「砂塵を撒いて若獅は・・・」と口ずさんで歩いていた母の姿を思い出して、まだ若かったのに、当時の母は強かつたなと思う。

私には、姉と二人の兄がいたので、姉や兄達の工場動員の時の話を通じて、戦時中であることを実感して

幸いなことに、私達は千里山に居て、空襲で逃げまじう経験もせずに済んだのだが、この時の空襲で、大阪の家と家財の大半を焼失した両親の気持はどんなだったか、察するに余りあるものであつたらうと思う。

大阪空襲のあとでは、被災した人や疎開を急ぐ人達で、千里第二小学校への転入生が急増した。四年生だった我々のクラスも超満員となり、二人掛けの机に、三人座らされる人達も出る有様だった。ついに、男子の雪組、女子の月組に加えて、男女組の星組が新設され、四年生の二学期から学年は、三組の体制となった。クラスが満杯状態になっていた頃から、クラス内でも毛じらみ(虱)が蔓延し始めた。当時、多くの家庭で、お母様方が、毛じらみの撲滅に苦勞なされたことと、母も随分と苦勞していた。授業中、自分の勉強机に広げた教科書の上に、前の席の人の髪から、毛じらみが落ちて来たという、信じられないようなことも、実際に経験した。(皮肉なことに、毛じらみを完全に駆除するには、戦後、進駐軍によつてもたされたDDTの散布まで待たねばならなかつた。)

昭和二十年、私達が五年生になる頃には、食糧不足に備えて、千里第二小学校の広い校庭も端から掘り返されて野菜島と化した。固い地面を掘り起こす際に、いた。

姉は、夕陽ヶ丘高等女学校を卒業して大谷女子専門学校に通い始めたものの、全員、工場に動員されることになり、川西航空機製造工場で作業の手伝いをしていた。そんな折、昭和20年6月の空襲で工場が全焼し、姉は、無事に避難できたものの、電車が止まり、歩いて帰って来たことがあつた。姉から聞いた爆撃機や避難時の話の中でも、鉄橋を歩いて渡って帰って来たという話には、驚いた。自分には、長柄川に架かるあんなに高い鉄橋を歩いて渡るような勇氣は、とても出ないと思ひ、姉の勇氣に敬服したことを覚えていいる。

旧制浪速高等学校の尋常科に在籍していた上の兄も、ダイハツ池田工場に動員されて、工場の作業に従事していた。いつだったか、片方の袖と上衣の半分が引き裂かれた状態で戻って来た。機械に袖が巻き込まれかけたときに、同級生が、非常ボタンで機械を止め、てくれて助かつたこと聞き、兄の友人の氣転に、家族一同感謝し、兄の無事を喜んだことだった。ダイハツ工場の動員では、兄達学生は、寮生活をしてた。その寮でも、しらみ(虱)や、のみ(蚤)の被害が広がっていた。栄養状態が悪かつたせい、か、当時は一般的に、かまれたあとの治りが悪く、化膿することが多かつた。兄を含め、特に状態の悪い人達が、治療のために一時

帰宅することが命じられた。兄も、治療のために、千里山に戻っていたが、その間に、池田のダイハツ工場も爆撃を受けて、寮も全焼してしまった。皮膚の炎症治療のためとはいえ、爆撃の危険な目に会わなかったのは、ありがたく、幸いなことだった。

下の兄も、北野中学に入学したものの、体育館が工場となっていた校内工場で、働く日々を過ごしていた。製本に関する作業でもしていたのか、一部が焼けて破損した紙の配布があつて、貰った白いアート紙のような紙を筒のように巻いて担いで帰つて来たことがあつた。途中そんな姿を見た人から「標的となるような目立った白い紙を担いで帰るのは危ないから捨てて行きなさい」と何度か注意を受けたそうだったが、兄としては、小学生の妹が役立てるに違いないの思いから、捨てずに必死に持ち帰つたと話していた。ノートのサイズに切り分けて綴じ、私が活用させてもらったのは勿論のこと、今でも当時の兄の気持を有難かつたと思つている。

その頃父は、北野病院副院長の重責を負い、(当時の院長は、京大教授の兼務が常だったので)戦時中の困難な実務の全てを取り仕切る立場にあつた。空襲警報発令の際には、入院中の患者さん方を病院前の扇町公園に運んで避難させ、警報が解除になると(爆撃の

あとには天候がよく急変したので)急いで患者さん方を又病院内に運び込まなければならなかつた。実際北野病院でも爆撃を受け、地下室の一部が破壊されることがあつた。空襲解除のあと、父の帰りが遅いので下の噴水まで迎えに出ていた折のこと、戻つて来た父の背広が、何箇所か赤く染まっているのを見て驚いたところ、患者さん方を全員無事に公園に避難させて、最後にバケツの水をかぶつて自分が避難しようとした際に、卓上にあつた赤インキが倒れて掛つてしまつたとのことだった。訳を聞いてほつとしたと同時に、戦時中、多くの人達が、それぞれの立場で、大変な思いをされていることも実感した。

小学校四・五年生であつた我々の世代の者が、戦時中に果たせた役割は殆んど無く、実際に参加した作業としては、吹田市内で行われた家屋の強制取り壊しの跡地で、瓦割りの作業に出掛けた事くらいで(千里山会誌8号145頁「恐かつた瓦割りのお話」参照)、あとは(千里山会誌**号参照)学校や家庭での農作物の世話だつたらうか。学校の行事としては、佐井寺の神社に戦勝祈願に出掛けたこと、行軍という名のもとに、箕面や長柄川の堤まで長距離を歩いて 鍛練していたことが思い出される。

昭和二十年のいつ頃だつたか、家の前の郊外学園の

一つ(西天満小学校所有だつたか?)の校庭に毎日どこからか捕虜となつた人達の一団が到着して整列し、ドラムカンを運ぶ作業に従事する光景を 目にするようになった。家の窓から様子を見るだけだつたが、みんな良さそうな人達に見えた。作業は、郊外学園の周辺の小さな丘や砂山の斜面に穴を掘つてドラムカンを隠すというものだった。その内に、ドラムカンの中味は石油で、爆撃から守るために避難させているのだという噂が伝わり、我家でも、もしこの辺りが爆撃されたら、引火してひとたまりもないと案じるようになり、私も恐ろしい話だと不安を覚えていたが、幸い大事に至ることなく、昭和二十年八月十五日の終戦の日を迎えることになった。

大阪の空襲で、大阪市内にあつた家を失つていた我家では、円山町に売家があると聞いた父が、その家を求めて引越すことを決断し、八月の初旬に、円山町に引越した。円山町で新たな生活を始めた数日後に、終戦の玉音放送があり、私達の戦時中の日々も終わりを告げた。

千里山で過ごした戦時中の私の体験は、主に四年生から五年生の夏までのことだったが、家庭では両親、学校では先生方の庇護のもと、危険な目にも会わずに過ごせたのは、幸せなことだった。千里山が、爆撃を

受けずに済んだことも、大変に恵まれたことだつた。防空壕に入り、警戒警報や空襲警報の発令に振り廻され、食糧難の日々を体験したとは言え、今にして思えば、戦時中の体験は、どれも貴重なものであり、平和な時代にも、参考となるものであつた。家族についての思い出も、戦時中のものは、より深みのある思い出となつていることを思えば、こうした困難な時代の日々を、千里山で過ごせた幸せに、今も感謝の念を深めている。

おわり



昭和十九年 春
ご自宅近くの桃畑にて 筆者